HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	〈翻訳〉ユダヤ学の概念について　　イマヌエル・ヴォルフ
著者	佐藤，貴史；SATO，Takashi
引用	北海学園大学人文論集(80)：89-112
発行日	2026-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

〈翻訳〉
ユダヤ学の概念について

イマヌエル・ヴォルフ
佐　藤　貴　史（訳）

ユダヤ学（Wissenschaft des Judenthums）について語ろうとするならば，次のことが自明である。すなわち，ここでの Judenthum という語は，宗教，哲学，歴史，法制度，文学一般，市民生活およびあらゆる人間的事柄に関連しており，ユダヤ人の状況，特質，彼らが成し遂げたものすべてを示す総体概念（Inbegriff）として，そのもっとも包括的な意味で用いられているのであり――ユダヤ人の宗教だけを意味するような，より限定された意味において用いられているのではない。たしかに，Judenthum をそのあらゆる細分化のなかで基礎づけ，条件づけているのは宗教的理念（die religiöse Idee）である。とはいえ，この理念がいたるところで生に移入され，そしてその生と結びつき，具現化されればされるほど，宗教的理念をそのあらゆる形態と変容のなかで理解しようとしない限り，宗教的理念を完全に認識し，把握することは難しくなる。もちろん民族の生全体がさまざまな仕方で展開していくとき，宗教的なものの領域からは程遠い側面や方向性が存在する。しかし，Judenthum においては，人間的生のあらゆる状況に対する宗教的原理念（die religiöse Uridee）の影響はどんなものよりも明白である。

Judenthum はその当初の創設以来，われわれの時代にいたるまで，すなわち少なくとも三千年という期間のあいだ，独自かつ自立した全体として保たれてきた。もちろん外部からの異質な見解もまた，しばしば Judenthum に対して影響力を及ぼした。なぜなら身体世界と同様に精神世界においても，互いに向けて作用し合うことなしに，そもそも二

つの物事が同時に存在することはないからである。しかし，Judenthum が異質なものをみずからのうちに受け入れたならば，その異質なものは Judenthum の根本原理（Grundprincip）に忠実であり，その原理とみずからを同化させ，それと一つのものへ融合しなければならない。同様に，Judenthum から発出したすべてのものは，どこにあっても Judenthum の根本理念の特徴を担っており，あらゆる形態のもとでその特徴をほのめかしている。歴史が疑いなく明らかにしたように，このあいだに Judenthum がみずからの立場において人類に対して行使した影響は計り知れないほど重要なものである。異質な場所において，エジプトの影響のもとで創設されたにもかかわらず，エジプト的な民族教育とはまったく異なる方向性を取ったことで，その内的な独自性にしたがって Judenthum は，みずから以外の世界に対して異質である状況やその世界から分離している状況につねにとどまっていた。しかし，精神的内実（der geistige Inhalt），つまり Judenthum の理念（die Idee）は地上においてもっとも違いのある諸民族にも伝達された。

さて，きわめて長いあいだ世界史のなかで保たれ，豊かな成果とともに人類の形成に対して影響を与えたこの理念とはいかなるものか。――この理念はもっとも簡素な本性に由来し，その内実はわずかな語で表現される。それは万象における無条件の単一性の理念（die Idee der unbedingten Einheit im All）である。この理念は，一つの語で言い表される。すなわち YHWH，これはまさに永遠性のなかで存在するあらゆるものの生ける単一性（die lebendige Einheit alles Seyenden in Ewigkeit），時間と空間の規定の外側にあって無条件に存在するもの（das unbedingt Seyende außer der Zeit- und Raumbestimmung）を意味している。――この理念はユダヤ民族に啓示されたのであり，すなわち与えられたものとして立てられている。しかし，人間精神がこの理念を普遍性のなかで捉える準備がほとんど整っていないときに，このことが起きたのである。なぜなら，人間は感覚的なものと多なるものから普遍的単一性へ，つまりすべてを包括し，〔そこに〕すべてが存在するモナス（Monas）〈単一的実在 訳者〉へとみずから

を高める時間を必要とするからである。それゆえ，神的単一性（die göttliche Einheit）の理念は，Judenthum が教えているように，感性の範囲からいまだ高められていなかった民族によってわずかな仕方で徐々に把握され認識されることができた。神性の理念は人格性と個性の形式のもとでまずはさらに表現されなければならず，その全体的普遍性のなかでただ段階的にみずからを明らかにできた。神的理念は人間のもとでみずからを保存し，ますます精神的に発展し，一つの身体におおわれ，そして人間が認識できるところへと来なければならないし，そうなるはずだった。こうして Judenthum は，精神的なものと神的なものの世界を人間的生の世界と密接に結びつけた。しかし，Judenthum はその最初の啓示のなかで神的なものを表現したが，それは身体世界と比べる術もなく，感覚的形象によっても表現できない生ける精神的単一性（lebendige, geistige Einheit）である。とはいえ，神的理念が囲まれ，その漸次的展開と発展が生じた身体とは――モーセ〔ユダヤ〕的神政政治（Mosaische Theokratie）だった。こうしてユダヤ民族は，かかる神的理念の保護者としての意味において，祭司をもった民族――神の民になったのである。

ところが Judenthum の理念は，一つの純粋に精神的な原理として，それが啓示された時代において，ユダヤ民族の表象方法や教育段階，とにかくさらには他の民族のそれとも，まったく一致してはいなかった。それゆえ，われわれはこの理念が最初に知れ渡ったときから，それは絶えざる不安定のうちにあり，不断の闘争に包摂されているのを見る。しかし，真の生命性の要素として，そもそも精神的なものの領域においては，静止や停止は異質である。むしろ，絶えざる運動のうちにいつまでもとどまりながら，つねにみずからを展開していくことこそが，精神の本性である。――さて，ユダヤ国家において，その基礎をなしていた Judenthum の精神的原理がいよいよ展開していった一方で，ユダヤ民族はそれを一層生き生きと認識するように教育された。しかし，ユダヤ民族がなお囚われ，そこへとあらゆる周辺諸民族が誘き寄せられる感性のあり方に対する神的理念の闘争，ひとたび表明されるとあらゆる障害を克服し，ますます発展して普遍

的なものへと高められねばならなかったこの理念の不断の運動，こうした興奮はユダヤ王国の分裂，その絶えざる内的および外的闘争のうちに現れ出たのである。イスラエルの預言者たちは，宗教的根本理念に国家の存立が結びつけられていたことをよく理解していた。それゆえ彼らは，統一の象徴として立っていた神殿のほかに，第二の神殿が存在することを許容しようとはしなかった。だからこそ，国家のあらゆる原則が宗教的根源原理（Urprincip）にしたがって選び取られないならば，測り知れない不幸が訪れることを彼らは予言したのであった。とはいえ，いつの日か神的理念が普遍的に承認されるならば，彼らは人類に無限の至福がもたらされることを告げ知らせたのであった。

しかし絶え間ない分裂と動揺は，普遍的支配を求める周辺諸民族に対して，これ以上みずからを保持することができなくなったほどに，この小さなユダヤ国家をすぐに弱体化させたにちがいなかった。ユダヤ民族は外的独立を失い，いまやその内的で固有の自立性，その民族性をただ――みずからに固有な宗教的世界のうちにのみ見出したのである。それゆえ，このバビロン捕囚は，神的理念の発展に対して並外れた仕方で役立ったのである。いまやようやく，この理念はユダヤ人の内的生活全体と織り合わされ，融合された。それはそうと，カルデアの教育がユダヤの教育に及ぼした影響については，周知のとおりである。さて，別の強力な部族がアジアの諸民族に対する支配を我がものとし，当時の方法と精神にしたがって，新たに勝利を収めた征服者として，知られていた諸民族の大多数を一つの王笏のもとに統合し，普遍的君主国へと無理やり押し込めはじめたとき，ユダヤ人は旧王朝の敵ではあっても，新たな王朝の敵とはみなされえなかった。彼らは祖国への帰還が許されたのであった。しかし，ここで注目すべき出来事が生じたことをみよ。すなわち，数十万の民が離散のうちにとどまり，ユダヤの統治体へとふたたび併合されることはなかったのである。だが彼らは，どこにあっても，みずからの民族性が依拠していた同一の理念を保持し続け，Judenthum の信奉者にとどまり，それによって一つの鎖の環をなしていた。

だが，あらためてユダヤ国家が成立し，Judenthum の象徴であり統合点として，一つの神殿が新たに建設された。もし内部における理念の闘争がある程度鎮まり，政治的原理と道徳的原理とが宗教的原理によって不可分の統一へと結びつけられている，みずからの立法の真の精神とユダヤ人がさらに和解し，こうして今後ふたたび Judenthum の根本理念から離反することがなくなったのであれば，しかし，サマリア人が本来のユダヤ人から分離したことによって不断の争いの原因が据えられたのであれば，ここで統合されるべきであった祭司的権力と世俗的権力との対立はすぐに絶えずくり返される動揺のきっかけとなりはじめただろう。とくに外部からの闘争はそれ以来激化していった。のちに Judenthum とはまったく異なる原理が，Judenthum と衝突することになった――ギリシア性（das Griechenthum）である。Judenthum においては，神的理念は与えられたもの，啓示されたものとして〔そこに〕含まれている。これに対して，ギリシア性においては，あらゆる認識が人間精神そのものから発展してきた。両者は，それぞれ異なる方法にしたがって，人類精神の形成史におけるもっとも重要な契機である。ギリシア性は, Judenthum と接触したころ，それまで支配的であったアジア世界に対する勝利をすでに祝っていた。異なる原理は敵意に満ちた原理である。それらは互いに相手に向けて浸透し合い，相手を解体しようとする。こうして，たいていの場合，二つから一つの新たな所産，独自の第三のものが生じる。たしかに Judenthum は，その独創性と内的一貫性において揺さぶられることはあっても，滅ぼされることはなかった。また，ここでのヘレニズム的原理（das Hellenische Princip）は，祖国の地の外にあるシリア王国では，もともとの力と威厳を持ち合わせていなかった。ヘレニズム原理にとってこのような状況のなかでは，みずからの精神を他の諸民族に植え付け，無理強いしようとする考えは遠いものであった。より平和的にユダヤ的原理とギリシア的原理が出会ったのは，エジプト，とくにアレクサンドリアにおいてであった。なぜなら，ここでは両者は硬直した対立のまま互いに向き合っていたのではなく，両者の只中に位置する第三の原理，すなわちエジプト的原

理（das Aegyptische [Princip]）によって和らげられたからである。それゆえ，ここでは時とともに，これら三つの原理からさまざまに構成された新たな原理が形成されたが，その際，異なる構成要素は確認できる仕方でとどまっていたのである。すなわち，フィロンの哲学，グノーシス主義，新プラトン主義である。――しかしその一方で，Judenthum は絶えず外部から敵対され，やがて内側におけるさらに破壊的な運動によって揺さぶられた。いまや民族の生と緊密に結びついた宗教的原理を理解し解釈するさまざまな方法，そして，甚だしく脅かされた国家の将来に対して，その方法に基づくさまざまな希望は神的単一性の崇拝者たちを，政治的党派と同じくらい多くの宗教的分派へと分裂させた。発展しつつあった宗教的理念は発酵状態のなかにあり，そうした心情のすべての持ち主は決定的な出来事が間近に迫っていることを予感させられた。こうしてユダヤ地方の人々は圧倒的に優位なローマ人に対して最後の戦いを開始し，驚くべきことに死に際してみられた途方もない力が発揮されたにもかかわらず――ユダヤ国家は敗北した。しかし，古代における最大かつ最後の普遍的支配であったローマ帝国のなかではまさに，その固有の原理に対する保持力は失いはじめていたとはいえ，かつて一つの小民族のうちに生き，一定程度にいたるまで発展してきた理念をみずからのうちに受け入れるための巨大な身体が形成されていたのである。こうして，その理念がみずからの普遍性において一般的なものへと高められていった。これこそがキリスト教（das Christenthum）によって実現したのである。

古代における諸民族の生は，一般に感性的かつ有限的なものの領域で進みながら，より高次なるものと永遠なるものを，ただ予感し，戯れるようなイメージのうちに描き出していた。それはわずかな卓越した賢者たちだけによってより精神的かつ真なる仕方で把握されたのであった。この生はたしかに個々の徳を多方面にわたって鍛え，強化するものであり，また人間精神にとっては，人類の幼年時代として，歴史的につねに高い関心の対象であり続けるであろう――〔しかし〕その生はみずからの循環を回し尽くし，いまやより真剣で成熟した生へと形作られるべきであった。神的理

念は諸民族のあいだに広まり，彼らをより高次の意味へと高めた。とはいえ，諸民族はみずから自身によって，その異なる立場にしたがって，さまざまに把握され，形成され，そして異なる衣で包み込まれたのであった。これに対して，ユダヤ国家はすでにその使命を果たし終えていた。すなわち，純粋な神的理念が王座を占めていたが，感覚に対して像として示されることはなく，ただ思惟する精神においてのみ理解可能なものであった神殿，このより高次の神殿，この全建築の礎石とともに，ユダヤ王国は崩壊した。こうして一つの民族は自由と自立とを奪われたのであり，この両方をただ完全な度合いで享受するか，あるいはさもなければまったく享受しないかのいずれかしかできなかったし，それしか望まなかった。公的生活と家族生活，学問と芸術といったすべての関係が同一の原理によって規定され制御されていた民族。その文学はますます発展していく宗教的理念の表現以外の何ものでもなく，その詩はまさにこの理念の讃美以外の何ものでもないような民族。――ユダヤ人の王国は滅びたが，Judenthum は滅びなかった。――数十万の人々がなおも同一の理念を告白し，それどころか不幸はかえって彼らをその理念といっそう強く結びつけ，彼らはそれを携えて全世界へと向かって行ったのである。ユダヤ人はどこにあってもみずからの民族的固有性を保持し，どこでもユダヤ人であり続けた。民族が不幸になればなるほど，それだけいっそう確信をもって，再統合と刷新された輝きに対する幼子のごとき希望を抱いた。すべての不正を償い，あらゆる真理をはっきりと明らかにするメシア的終末の待望は，とりわけ傷つき，不幸な人類にとって，無垢で至福に満ちた黄金の原初時代に関する説話と同様に，きわめて自然なものである。不幸，圧迫，迫害，これらの激しさが高まれば高まるほど，それらは苦しむ者たちのうちで，その状態が永続しえないという確信をいっそう生き生きとしたものにする。また，苦難をともにする者たちはより緊密にお互い求めあい，より幸福であった過去の証として残されているすべてのものに，いっそう固くしがみつくようになる。――しかし，国家滅亡後の数世紀においてユダヤ人のなかの律法学者たちはまた，ふたたび変化する状況にしたがって，Judenthum の理

念を生と緊密に結びつけることを理解した。すでにモーセ的国家体制においては，すべての公的制度がこの根本理念を想起させるだけでなく，その記憶は衣服（飾り糸，テフィリン）にいたるまで，家族生活とも結びつけられていた。いまでは，公的な民族の生，祖国の聖なる土地に関連したすべてのものは，その意味を失ってしまった。神殿も祭司も，もはや存在しなかった。いまやかつて公的生活と意味ある仕方で結びついていたすべてのものが家族生活と織り合わされることが重要になった。この計画の基礎には深い人間認識があった。家庭生活は道徳の源泉であり，またそれを身につける学校であり，慣習や慣行は家庭のかまどに結びつけられて，人間の心情のうちに深く，そして逃れがたく根づいていた。こうしてラビたちは，ユダヤ人の生全体に宗教的想起と風習を織り込んだ。彼らがそれら大部分に付与した神秘的意味，こうした儀礼世界の一つ一つの細部について争い決断を下す敬虔な真剣さは，保持されていたあらゆる宗教的行為や民族的しきたりに対する聖なる畏敬の念で民族を満たしただけでなく，民族は人の手で古来の伝承へと渡されたと理解したタルムード学派の新たな規定をも，聖書と並行して進む口伝伝承として熱心に同じ敬意をもって受け入れた。こうしてタルムード学者たちは，もっとも細心の注意を払って，しかも最善の意図において，（彼ら自身が表現したように）律法の周囲に垣根を築いたのであり，それによって律法がいっそう不可侵で純粋なまま保持されることを願ったのである。このようないたるところ聖性と敬虔さのヴェールに包まれた独特の生活様式は，その本質にしたがってきわめて明白にして唯一の理念に基づきながら，ユダヤ人によって細心の慎重さをもって固く保持され，世代から世代へと伝えられ，絶え間ない外的圧迫によって，みずからのうちでいっそう首尾一貫し，動くことなく結び合わされた。これこそが，Judenthum をこれほど長く存続させてきたものなのである。Judenthum に本来内在していた宗教的理念の生命力がなかったならば，その精神はみずからのうえにのしかかっている多くの外的行為のもとに屈してしまったにちがいないだろう。しかし，活発な内的精神原理は，つねに新しい生命，つねに新しい力を発揮した。また Judenthum は，

このようなパリサイ的・ラビ的な具体化と並んで，純粋に精神的・思弁的な側面からも形成された。これは一部にはすでにエッセネ派（テラペウタイ派）やサドカイ派の諸分派によって〔はじまり〕，その後，ギリシア哲学に信頼を寄せた複数のユダヤ人による体系のうちに〔現れ〕，後には最後にとくにカバラにおいて〔現れた〕。こうしてわれわれは，もっとも優れた教義を同様にユダヤ教から借用したイスラームが，かつて学問に加えられた損害を償おうとしているかのように見えたとき，中世においてもなお，ユダヤ人がアラブ人と共同して，とりわけスペインにおいて，学識の分野を開拓していたのを見る。ユダヤ人は，ヨーロッパ世界に対してアラブの学問を通訳する者となった。そして，ヨーロッパにおいて，真の学問的生活の復旧，というよりもむしろその創設がはじまった。その場限りのギリシア性が衰えつつあるなかで，いわば遺産として，ヨーロッパ的人類に身をゆだねたことで，Judenthum はまた新しい文学的生活の形成に影響を及ぼしたのである。ようやく近代史のはじまりになるとユダヤ人は文化においておくれを取りはじめた。まずとくに十字軍の開始以来，カトリック王フェルディナンドにいたるまで，もっとも残酷な仕方でユダヤ人に対して荒れ狂い，持続的で敵対的な圧迫と隷属がどうやっても逃すことのない影響力をうまく働かせたのが暴力的な狂信主義である。そして，ただ Judenthum の根底にある理念のエネルギーだけがこの影響力をこれほど長く寄せつけないようにできたのである。精神は身体から自由な運動を奪った鎖のもとで，ついには必然的に屈しなければならなかったのである。公的生活から排除され，特定の活動に制限されたことで，ユダヤ人はいよいよみずから固有の世界へと，すなわち父祖から彼らに伝えられたものへと押し戻されていった。しかし，このような古代から保持されてきた世界のうちでの生活は，ますます窮屈で息苦しいものとなっていった。なぜなら，生きた精神はもはやその世界のなかを自由に運動しえなかったからである。――それ以来，ラビたちは今日にいたるまで，スコラ学的な拘束状態にいつまでもとどまっている。だが，これこそがスコラ学の本質なのである。すなわち，聖なるものであり不可侵として前提された伝統の文字か

ら出発し，そこから人間認識のあらゆる対象をあらゆる方向へと展開し，その結果，精神の自由で固有の生きたあらゆる運動を遅延させ，真なる無限の理念に関する理性的かつ自立的なあらゆる把握を不可能にしてしまう[1]。

このようにして一般的にいえばユダヤ人たち，しかしほとんどの場合，律法学者，すなわちラビたちは数世紀にわたって息苦しい孤立状態のうちに，一方的な拘束状態のうちに，そして消え去った世紀の文字に関する静かな思索のうちで生きてきた。しかし，歴史を知る者は誰であっても，この状態を不思議に思うことはない。というのも，中世におけるヨーロッパ・ユダヤ人の歴史は，その大部分においてこの不幸な民族を窒息させ抹殺するために，この民族の敵たちが試みた一連の実験を含んでいるからである。アメリカやアフリカの広野におけるヨーロッパ的貪欲の歴史だけが，さらなる悪行を示さなければならないのである。――しかし，このようにしてJudenthumがついに沈み込まざるをえなかった夜もまた，ときおり恵み深い極光を照らし出した。ユダヤ人の家庭内生活のなかには，古いしきたりと慣習とともに，より高貴な人間本性と有能な精神の消し去ることのできない痕跡が保たれていたのである。――しかし，もっとも重要なのは次の点である。すなわち，いわば老いの重みと外的暴力の圧迫に屈し，弛緩

---

[1] それゆえ，デカルトをもって学問におけるスコラ学の時代は途絶えるのであり，こうして彼は新しい自立した哲学の父となったのである。スピノザが彼について次のように述べているとおり，彼は「物事を探究するにあたりできる限り用心深く進むため，以下のことに努めた」からである。

一　すべての先入見を捨てること。

二　すべてのことがらがその上に立てられるべき基礎を発見すること。

三　誤謬の原因を明らかにすること。

四　すべてのことがらを明晰判明に理解すること。

Bened. De Spin. Oper. Ed. Paulus Vol. 1., Princip. Philos. Cartes. p. 1.〔松田克進・平松希伊子［訳］「デカルトの哲学的原理」『スピノザ全集Ⅰ』，岩波書店，2023年，37-38頁〕

した昏睡状態へと沈み込んだあいだに，Judenthum はその固有の生き生きした永遠の根本理念にしたがって，その最高度の規定性，一貫性，そして自由のなかで――あたかもこれがその表現の最後にして決定的な行為であるかのように――思弁という純粋思惟の方法に応じて，すなわち純粋に学問的な仕方で示されたのである。このことはベネディクトゥス・デ・スピノザ，すなわちその鋭利な感覚と深遠さは数世紀を先んじており，今日のより一貫し，より深い哲学に対する最高に重要な影響が明白である人物の体系において生じたのである。たしかにスピノザは Judenthum の外的儀礼とは関係を絶ったが, その代わりに Judenthum の内的精神をよりいっそう生き生きと把握していたのである。

こうして Judenthum は，世界史の最大部分において人間精神の発展における重要かつ影響力ある契機として示される。これを認めない者は単に，あらかじめ抱いた先入見をもって，他のすべてと同様に歴史の頁をも眺める者である。あるいは世界史のなかに個別的出来事の寄せ集めだけしか見ない者であり，そこにある色とりどりの出来事の多様性だけがその者を喜ばせ，血なまぐさい戦いや大胆な征服，驚くべき偶然だけがその者にとって重要なのである。好奇心の正当な満足，驚異的なものへの愛着を自惚れて育てること，想像力の無内容な娯楽，もし出来事のなかに他の内容が見いだされないとすれば，世界史の年代記がわれわれに提供しうるのはこれだけであろうし，これ以外には何もないであろう。しかし，出来事とはみずから運動し発展する精神の顕現にほかならず，まさにこの生き生きとした精神の段階的発展こそが世界史の教育的内実を形成するものであり，それによってのみ過去と現在の正しい把握が可能になるのである。このような観点から見れば，もし歴史が各時代のもっとも偉大な人物たちの夢に関する完全な描写を伝えているとしても，われわれは行為と同様にその夢からも，精神のその時々の立場を認めることができるならば，歴史は同じだけ充実し教訓に富むものとなるであろう。

さて，Judenthum の理念のように，これほど長く連なる世紀を通じてみずからを発揮し維持し，これほど長い期間にわたって世界史のなかで生

き生きと作用してきた理念は，まさにそれゆえに人類そのものの本質に根ざしていなければならない――したがって，それは思惟する精神にとって，最高の重要性と意義をもつものなのである。

しかし，Judenthumはわれわれの前に二重の形態で存在している。第一に，歴史的・文献的文書，すなわちきわめて包括的な文書群のなかに含まれているような形態であり，第二に，なお生き生きとした原理として，地上全体を覆って伝播している数百万の人々によって認められている形態においてである。後者の場合，たしかにもともとの単一の理念は敵対的環境の酸素によって次第にいわば格下げの状態へと移行して行った。彼らが律法の周りに植えた垣根は徐々に四方八方に広がって行ったので，それは干からびた防壁として増え続け，内なる聖所への道を塞ぐばかりか，聖所自体をも埋めてしまった。しかし，より自由で学問的な感覚は，千年にわたる習慣によって機械的かつ無思慮なものとなった儀礼制度という雑草を突き抜けて進む――そして，かつてその明晰さのなかで啓示されたのと同じ神的理念をその内部においてなおも見出すのである。また，とどまることなく前進する精神の影響が，すでにJudenthumにも力強く現れはじめている。外的圧迫が終わるところでは，精神もまたより自由にそれ自体として展開しはじめる。理念は，人によって押し込まれた動くことのない外壁からみずからを解き放とうと努めているのである。それはふたたび，その内的で精神的な本質にしたがって，みずからを啓示しなければならない。

ここで示されたように，一つの全体としてのJudenthumは一つの固有の内的原理に基づきながら，一方では包括的な文献のなかに，しかし他方では多数の人間から成る階層における特殊な生と網の目のなかに包含されており，それ自体として学問的に扱うにふさわしく，またそうすることが必要である。ところが，いまにいたるまで一度も，Judenthumは一つの完全に独立した観点から，その範囲全体のなかで学問的に叙述されたことはなかった。このような仕方でユダヤ人学者がとくに初期の時代に行ったことは，たいていは神学的内容をもったものだった。とりわけ歴史は，ユダヤ人学者によってほとんどすべて無視され放置されていた。しかし，

Judenthum の個別的部分の文献的発展に対してキリスト教学者がどれほど大きく貢献したとしても，キリスト教学者はほとんどいつもキリスト教神学を歴史的に伝えるためにのみ Judenthum を論じた。それは，たとえキリスト教学者が Judenthum それ自体を悪意に満ちた仕方で際立たせようとする意図を，あるいはかつて主張されたように，〔Judenthum を〕否定しようとする意図をけっしてもっていなかったとしても同じである。一般的・文献的観点と関心から出発した，この分野における重要な学術的業績のいくつかは，もちろんユダヤ神学から区別することが困難なキリスト教神学の手段あるいは準備教育として単に存在するわけではないけれども，これらの成果はつねに対象全体の個別的要素にのみ関係している。とはいえ，Judenthum がその全体的内容にしたがってそれ自体で学問の対象になりうるならば，そして一つのユダヤ学（eine Wissenschaft des Judenthums）が形成されうるならば，そこではまったく別の論じ方について語られるのは当たり前である。いかなる種類のものであろうとも，その対象の本質にしたがって人間精神の関心を引き，しかもその対象の種々の形態と展開のなかに豊かな内容をもった対象であればどんなものでも，特別な学問の対象になりうるのである。そうであるならば，このような特別な学問の内実は，その対象の範囲全体にしたがった[2]，その学問対象の体系的展開と描写であり，ある異質な目的のためにあるのではなく，それ自体で存在する。われわれはこのことをユダヤ学に適用するならば，その本質にとって次のようなことが明らかになる。

1）ユダヤ学は Judenthum をその範囲全体のなかで理解する。
2）ユダヤ学は Jundenthum をその概念にしたがって（seinem Begriffe gemäß）展開し〔取り出し〕，個別的なものをつねに全体的なものの

[2] たしかにある対象の個々の側面は，しばしば内容豊かであるために単独で学問的に論じられる。とはいえ，その対象の部分すべてを連関のなかで余すところなく描写することが完全な学問の本質である。

根本原理へと戻しながら，Judenthum を体系的に描く。

3）ユダヤ学はその対象を，ある特殊な目的のためではなく，あるいはある特定の意図からでもなく，対象それ自体のために，それ自体において論じる。――ユダヤ学はあらかじめ抱かれた意見をもたずにはじめられ，最終的結論に無頓着である。ユダヤ学はその対象を，好都合な光や不都合な光のなかにも，また支配的な見解との関係のなかにもおくことを目指すのではなく，その対象がそのようにあるようにその対象を説明する。学問はそれ自体で自足し，それ自体において人間精神の本質的欲求である。それゆえ，学問はみずからの外側に目的とする利益を必要としない。しかし，だからこそ，どの学問も他の諸学問に対してだけでなく，生に対してもまたもっとも重大な影響を及ぼすということはけっして小さくない真実であり，さらにそれはユダヤ学によっても何ら苦もなく証明されうることである。

さて，どの学問もその対象の本質的独自性にしたがってより多くの部分へ分かれるように，このことはまたわれわれの学問においても同様だろう。しかし，まずわれわれの学問は上で述べられた，その対象の二重の開示（Offenbarung）にしたがって，二つの部門へ分かれるだろう。

Ⅰ．その歴史的・文献的記録化における Judenthum 研究

Ⅱ．世界のあらゆる国々にいる今日のユダヤ人と関係する統計的 Judenthum 研究

とはいえ，いかにして Judenthum が時代のなかで次第に発展し形成されたかということについて，Judenthum はまずは歴史的に，しかしそれからその内的本質と概念にしたがって哲学的に描かれなければならないだろう。両方の描き方は，Judenthum 文献に関する文献学的認識を前提としなければならない。それゆえ，われわれは1）Judenthum の文献学，2）Judenthum の歴史，3）Judenthum の哲学をもつことになる。

1．Judenthum の文献学はユダヤ人の文献全体の解釈学的・批判的了解であり，ユダヤ人の特別な世界，ユダヤ人独自の生活様式と思考様式がその文献に書き留められているとみなされる。この文献がさまざまな言語でおおわれ，さまざまな素材を含み，さまざまな時代に耳を傾ける限り，文献学もまたそのさまざまな方法をもつことになるだろう。

2．Judenthum の歴史は，Judenthum がどのように時代のなかで発展し，あらゆる方向に向かって形成されたかということに関する Judenthum の体系的描写である。しかし，このような方向のうちには，とくに三つ〔の方向〕がある。すなわち宗教的方向，政治的方向，そして文献的方向であるが，これらはいたるところでもっとも密接に相互に絡み合っており，諸連関のなかで描かれるならば普遍史を，しかし個別的〔に描かれる〕ならば宗教史，政治史，そして文献史を示している。

時代が経過するなかで Judenthum の精神的原理が現すような何重もの立場にしたがって，しかし全体的なものの形成的生命力であるような理念が現れるさまざまな段階にしたがって，歴史はさらに多くの時期（Perioden）に分かれるだろう[3]。

3．Judenthum の哲学。これはその対象に向けて，Judenthum の概念をそれ自体においてもっており，Judenthum の哲学はこの概念をその内的理性性（Vernünftigkeit）にしたがって発展させ，その真理において明示しなければならない。Judenthum の哲学は，神的理念が

---

[3] 以前ならびに近年の丹念な学者によって歴史分野においても文献学分野においてもすでに成し遂げられているきわめて重要なものとその構成は，蓄えられた素材の一覧表が必要とする生産的な仕事には及ばないものの，たしかに学問を受け入れなければならない。しかし，学問はその重要なものを批判的にえり分け，その立場にしたがって処理しなければならない。

Judenthum のなかでみずからを段階的に開示するにしたがって，その神的理念を把握することを教える。さらに Judenthum の哲学は，外的な歴史的所与と生ける理念の内的な運動のあいだにある連関を指摘する。――歴史は諸々の出来事，つまり過去とのみ関わりがあるのに対して，哲学は現在，つまり今日の Judenthum における理念の立場をも対象にしている。――しかし，いまなおわれわれの前にあり，生ける形態である Judenthum は，Nr. Ⅱとの関係において，直接的に過去の歴史に加わり，とくにその宗教的･政治的状況を考慮すると，これにはあらゆる国にいるユダヤ人の一般的統計が関連している。

これがもっとも一般的な概略のなかでのユダヤ学の枠組みだろう。――文献研究，構成，発展に関する巨大な領域！ しかし，対象だけが学問と人間精神一般にとって重要性をもっているならば，つねに進歩する対象の発展もまた止まることはできない。それゆえ，真に学問的感覚は，その対象の多面性や巨大な範囲のために，このような学問の基礎づけの可能性を疑うこともできない。学問の本質は普遍性，無限性であり，ここにあるのはまさにその高貴な本性があらゆる制約，あらゆる停止，あらゆる停滞を排除する人間精神にとって学問がもっている刺激と魅力である。しかし，次のような問いが投げかけられる。すなわち，このような Judenthum の学問的取り扱いから，どのような利点が学問一般に対して生じるだろうか。――またしても，このような問いは学問の真の精神を把握したものから生じたのではないことがすぐにわかる。学問の別の対象に対すると同時に，そこから間接的に学問の全領域に対して広範囲に光を当てることなしに，とにかく何らかの方法で学術研究の領域に属している対象が詳細に解明され検討されることはどのようにして可能なのか。――学問の王国では何も分離されないし，そこでは何も個別化されない。むしろ，あらゆる学問は絶え間なく影響を与え合い，一つの内的調和を通じて相互に結びつけられている。――しかし，一つの原理に属する人間的認識の主要部門を，その全体的拡張のなかで，そしてその主要部門と接触し関係するすべ

てのものとともに統合すること，その普遍性のなかで発展させること，そしてその概念へと戻すこと，それゆえかつての時代の賛嘆すべき目論見が個別的に達成し集めたものを――考え抜かれた統一性へ向けて結びつけることこそ，われわれの時代の課題であり使命である。とはいえ，最初期の時代から人間精神の発展の歴史における根本的学問の達成に向けて，今日では研究者の眼はとくにオリエント，すなわちこの人間的文化の発祥地，このあり余る偉大さと崇高さをもった源泉へと向けられている。そうであるならば，Judenthum，この生気に溢れもっとも遠くにまで植えられた東洋の果実を純粋に学問的観点から根本的考察にしたがわせるべき時ではないだろうか。あるいは，人はヒンドゥー教徒やペルシア人における未知の事柄や遠くにあるものの魅力に対して，より近くにあり接近しやすいJudenthumの宝庫を取り扱わずに放置すべきなのか。あるいは，もはや後者からは収穫物は期待されず，すでに使い果たされたとでも言うのだろうか。こんなことを信じ込む者は，この収穫物がもっている内容の豊かさを知らない。

しかし，Judenthumは単に歴史的関心をもっているだけではないし，それは過ぎ去ったかつての歴史の頁によって保存されたにすぎない原理ではない。Judenthumはいまなお生きており，数を基準としても人類における，またヨーロッパ的人類においてさえ，些細ではない不可欠の部分からもまた認められている。その上，人類はヨーロッパの諸民族に対する，このような古代の生ける証言者の立場について議論している。さらに多くの点と同様に，ここでは中世の諸制度はそれが適用される可能性を失った。人類の立場は変化しているが，いまだにより安定したものにはなっていない。ユダヤ人の状況についてもまた，人はいまだに全般的に当てはまる原理を見つけていなかった。もしこのような主題に対する正しい決定がいつかなされるのであれば，それは学問的方法による以外のものではありえないだろう。Judenthumの学術研究はユダヤ人の価値と無価値，すなわち他の市民と同等に尊重され，同等の立場におかれることができるのか，またはできないのかということについて決定しなければならない。このよう

な学術研究だけがJudenthumの内的性質を知り，本質的なものを偶然的なものから，根源的なものを加えられたものから分離することを教える。学問だけが低俗な生の党派性，熱中，偏見を越えている。なぜなら学問の目標は真理（die Wahrheit）だからである。まさにわたしが考えているのは本来の学問，自由な学問，無限の学問，〈高みにある学問，天の女神〉であり，空虚な推論，つまり利己心，支配欲，ねたみや虚栄心といったあらかじめ抱かれた意見も属するような個別的意見の恣意的関係のなかにあるにすぎない自称学問，偽りの学問ではない。このような学問は発展する代わりに，いつも主張するだけであり，その対象の内的概念に基づく代わりに，大衆の只中でとにかく習慣になっているイメージの権威に依存している。真の学問は，このような敵対者と関係をもつことはない。なぜなら夜は始まりつつある日の前では消えてしまうように，敵対者も真の学問の前では姿を消してしまうからである。

手短に示唆すべき側面がまだ残っているが，それを考慮すれば，ユダヤ学の基礎づけはわれわれの時代の不可避の要件に思える。これはユダヤ人自身の内的世界である。この世界もまた，精神の止むことのない進歩によって，またその進歩と結びついた諸民族の生つまりその内部における変化によってさまざまな仕方で動揺させられ震撼させられている。いたるところで次のことが示されている。すなわち，Judenthumの根本原理はふたたび内的な欲求のなかに含まれており，時代精神にしたがってある形態に向けて発展しようとしている。しかし，時代にふさわしい仕方で(zeitgemäß)，この発展は学問の方法に基づいてのみ生じることができる。なぜなら学問性の立場はわれわれの時代の独自の立場だからである。いまやユダヤ学の形成はユダヤ人自身の本質的必要であるがゆえに，諸学問の領域はあらゆる人間に共通する場所ではあるものの，ユダヤ人という人間はとくにその学問に取り組むことに対して召命を与えられていることは明らかである。ユダヤ人は，人類の共通の活動的成果に対する活発な同労者としての真価をふたたび発揮しなければならない。ユダヤ人はみずからとその原理を学問の立場に高めなければならない。なぜなら，これがヨー

ロッパ的生の立場だからである。このような立場に基づいて，ユダヤ人とJudenthumがこれまで外部世界に向けて立たされていた異質者であるような状況は――消滅すべきであり，かつて一つのきずなが人類全体を結びつけていたというならば，それは学問のきずなであり，純粋な理性性のきずなであり，真理のきずなである。

〔訳者解題〕

ここに訳出したのは，イマヌエル・ヴォルフ（Immanuel Wolf, 1799–1847）によって執筆された19世紀ドイツのユダヤ学（Wissenschaft des Judentums）に関する最重要テキスト，Immanuel Wolf, “Ueber den Begriff einer Wissenschaft des Judenthums” *Zeitschrift für die Wissenschaft des Judenthums* (1822/1823), 1–24である。かつて訳者は，*Jüdische Geschichte lesen. Texte der jüdischen Geschichtsschreibung im 19. und 20. Jahrhundert*, herausgegeben und kommentiert von Michael Brenner, Anthony Kauders, Gideon Reuveni und Nils Römer (München: Verlag C. H. Beck, 2003) に所収されたヴォルフのテキストを翻訳し，訳者解題とともに本誌に掲載したことがある[1]。ただこのテキストは編者によって一部が省略されており，したがってその時の翻訳も抄訳とならざるをえなかった。これに対して，今回の翻訳は当時の雑誌に掲載されたオリジナルのテキストに基づいて訳されたものであり，ここに全訳を掲載する。

抄訳版に付された訳者解題では，いくつかの視点からヴォルフのユダヤ学理解の特徴について指摘した。ここではそれをくり返すことはやめて，今回訳出された抄訳版にはなかった部分に関する若干の解説とヴォルフのユダヤ学におけるメタ学問的視点について，他の研究者の解釈にも依拠し

---

[1] イマヌエル・ヴォルフ「ユダヤ学の概念について（訳者解題と抄訳）」（佐藤貴史［訳］，『北海学園大学人文論集』第70号，2021年3月），pp. 127–144.

ながら解説することで，訳者解題の責任を果たすことにしたい。

今回，新たに訳出した部分は本誌の 91 頁（「ところが Judenthum の理念は，一つの純粋に精神的な原理として……」）から 100 頁（「……みずからを啓示しなければならない。」）までである。なぜ編者はこの箇所を省略したのかは不明だが，訳者の見るところ，そこはヴォルフのユダヤ学理解というよりも，むしろ彼のユダヤ史理解が前面に出されている箇所である。もちろん，ユダヤ学において歴史は不可欠の構成要素であり，軽視してよい理由はまったくない。しかし，おそらく相対的に考えて，ユダヤ学の学問的特徴を捉えるうえでこの部分は優先順位が低いと判断されたのかもしれない。

本テキストを除けばヴォルフ自身がほとんど何も積極的にユダヤ学に言及していないこともあり，ヴォルフ研究はかなり限定されている。そのような状況のなかでも，18 世紀ドイツのモーゼス・メンデルスゾーンから 19 世紀におけるユダヤ学の成立にいたるまでの歴史をユダヤ人のアイデンティティの視点から考察したマイケル・マイヤーの著作などは，短いながらもヴォルフについて非常に重要な指摘を残している。

Zeitschrift
für
die Wissenschaft des Judenthums.

Herausgegeben
von dem
Verein für Cultur und Wissenschaft der Juden.

(Redacteur: Zunz Dr.)

Erster Band

Erstes Heft.

Berlin 1822.

1819 年，エドゥアルト・ガンス（Eduard Gans, 1797–1839）やレオポルト・ツンツ（Leopold Zunz, 1794–1886）などが中心となり，そしてのちにハインリヒ・ハイネ（Heinrich Heine, 1797–1856）も関わることになる「ユダヤ人文化学術協会」（Verein für Cultur und Wissenschaft der Juden）の前身組織がベルリンに創設された。ヴォルフはこの学術組織の会員であり，そしてその機関誌「ユダヤ学雑誌」（Zeitschrift für die Wissenschaft des Judenthums）に彼の「ユダヤ学の概念について」が掲載されたのである。

マイヤーによれば会長に就任したガンスと同様に，「ヴォルフはヘーゲルから触発されていたのであり，彼の綱領はこの偉大な哲学者の影響を示

している」[2]。スヴェン＝エリック・ローズもまたより詳細に協会におけるヘーゲル哲学の影響力を考察している[3]。ヴォルフのテキストを読めばわかるように，Judenthum に内在する理念や原理の強調，また時代精神にふさわしい仕方で Judenthum が発展することなど，ヘーゲル的な言い回しや雰囲気を感じとることはそれほど難しい作業ではないだろう。ユダヤ学とヘーゲル哲学の関係はヴォルフだけでなく，他のユダヤ学者の思想を検討するうえでも重要な視点である。

ただ，マイヤーやローズの研究を読むと，もう一人，ヘーゲルと比肩する哲学者の名前があげられている。スピノザである。実のところ，編者が省略した部分ではユダヤ史の他に，簡潔ながらも興味深い仕方で，ヴォルフはスピノザについて言及しているのである。「中世におけるヨーロッパ・ユダヤ人の歴史」の暗さにふれたのち，そのなかにあっても「恵み深い極光」が照らし出されたことを彼は告げる

> しかし，このようにして Judenthum がついに沈み込まざるをえなかった夜もまた，ときおり恵み深い極光を照らし出した。ユダヤ人の家庭内生活のなかには，古いしきたりと慣習とともに，より高貴な人間本性と有能な精神の消し去ることのできない痕跡が保たれていたのである。――しかし，もっとも重要なのは次の点である。すなわち，いわば老いの重みと外的暴力の圧迫に屈し，弛緩した昏睡状態へと沈み込んだあいだに，Judenthum はその固有の生き生きした永遠の根本理念にしたがって，その最高度の規定性，一貫性，そして自由のなかで――あたかもこれがその表現の最後にして決定的な行

---

[2] Michael A. Meyer, *The Origins of the Modern Jew: Jewish Identity and European Culture in Germany, 1749–1824* (Detroit: Wayne State University Press, 1967), 173.

[3] Sven-Erik Rose, *Philosophical Politics in Germany 1789–1848* (Waltsam: Brandeis University Press, 2014). とくに第 2 章を参照されたい。

> 為であるかのように――思弁という純粋思惟の方法に応じて，すなわち純粋に学問的な仕方で示されたのである。このことはベネディクトゥス・デ・スピノザ，すなわちその鋭利な感覚と深遠さは数世紀を先んじており，今日のより一貫し，より深い哲学に対する最高に重要な影響が明白である男の体系において生じたのである。たしかにスピノザはJudenthumの外的儀礼とは関係を絶ったが，その代わりにJudenthumの内的精神をよりいっそう生き生きと把握していたのである（本誌98-99頁）。

重圧と暴力に苦しむJudenthumであっても，スピノザにおいてJudenthumは「思弁という純粋思惟の方法に応じて，すなわち純粋に学問的な仕方で」示されたのであり，スピノザこそ「Judenthumの内的精神をよりいっそう生き生きと把握していた」という。

スピノザのうちに「人間として理解できない裏切り」を見たのはヘルマン・コーエンであった[4]。スピノザにまつわるエピソードを知っていれば，コーエンの憤りも理解できるかもしれない。しかし，ヴォルフは違った。ユダヤ教における「神的単一性」の理念は地上，そして世界史において広がり，「人類そのものの本質」に根ざしていなければならない。ヘーゲル的歴史哲学の枠組みに則っているようにも読めるが，マイヤーによれば，ヴォルフが示唆するのは以下の点である。「前近代世界において統一というユダヤ的理念はスピノザによってもっともよく理解された。この哲学者は当時のユダヤ教を拒絶し（そしてそこから破門され）たわけであるが。彼がスピノザを「純粋な」ユダヤ教の代表者として見ることができたことは，ヴォルフにとってどの程度ユダヤ史が概念の歴史――この民族の意識においては必ずしもいつも浮かんでくるわけではないもの――であったか

---

[4] 20世紀ドイツのユダヤ人思想家とスピノザの関係については以下の著作を参照されたい。佐藤貴史『ドイツ・ユダヤ思想の光芒』(岩波書店, 2015年)，とくに第4章。

をもっともよく示している」[5]。ヴォルフのスピノザへの言及はかなり限定されているが，ユダヤ学におけるスピノザの位置づけを知るうえでは無視しえない内容を含んだテキストであることがわかるだろう[6]。

テキスト冒頭にある Judenthum の定義から明らかなように，ヴォルフにとって Judenthum はきわめて包括的な概念であり，いわゆる宗教に限定される内容ではない。それに応じて，ユダヤ学もまたその下位カテゴリーのうちに Judenthum の文献学，Judenthum の歴史，Judenthum の哲学をもつことになる。クリストフ・シュルテが書いているように，ヴォルフのユダヤ学は「多分野的な企て（pluridisziplinäres Projekt）」[7]として練られていた。すなわちユダヤ学は「Judentum の広大な歴史的範囲，社会文化的・言語的・地理的多様性，そして現象の大きな相違ゆえに，必然的にその都度の方法をもった異なる分野が並存し，相互に必要とされ，協働

---

5 Michael A. Meyer, “Introduction to Immanuel Wolf” in *Ideas of Jewish History*, edited, with introductiins and notes, by Michael A. Meyer (Detroit: Wayne State University Press, 1987), 142; Meyer, *The Origins of the Modern Jew*, 174.

6 改革派ユダヤ教のユダヤ学者アブラハム・ガイガー（Abraham Geiger, 1810–1874）のスピノザ理解も考察に値するはずである。「次のような事実は消し去ることができない。すなわち，それ〔ユダヤ教〕は……古代の終りにキリスト教をおのれから生み出し，中世にはイスラームを生じさせ，そして本質的内実ではぐくまれながら，スピノザに手を加えることで，近代には哲学的観照の変形のきっかけとなった。このような世界的な力はそれ〔ユダヤ教〕のなかには残っていなかったが，ユダヤ教の精神はそれら〔キリスト教，イスラーム，近代〕のなかでは引き続きともに働いていた」。Abraham Geiger, “Allgemeine Einleitung in die Wissenschaft des Judenthums” in *Abraham Geigers Nachgelassene Schriften*, herausgegeben von Ludwig Geiger, zweiter Band (Berlin: Louis Gerschel Verlagsbuchhandlung, 1875), 40.

7 Christoph Schulte, “Über den Begriff einer Wissenschaft des Judentums,” *Aschkenes-Zeitschrift für Geschichte und Kultur der Juden* 7/1997, H. 2, 301.

しなければならない学問」[8]として構想されていたのである。しかし，そうであれば問題はこのユダヤ学を学問として一つに束ねるものは何かということではないか。シュルテによれば，Wissenschaft des Judentums の Judentum は「主格的属格（ein *genitivus subiectivus*）」であり「目的格的属格（ein *genitivus obiectivus*）」でもある[9]。言い換えれば，Judentum が学問をすると同時に Judentum を学問するのが Wissenschaft des Judentums である。そうであれば，主体としての Judentum と客体としての Judentum が存在することになり，ここに Wissenschaft des Judentums を一つの学問として束ねるメタ学問的視点が現れるはずである。訳者はいまだこの問いについて満足のいく答えをもち合わせていないが，ヴォルフのテキストからはこの問いに対する真摯な応答が聞こえてくるように感じる。

最後に，翻訳方針について述べておきたい。この全訳では，抄訳版と同様に Judenthum は日本語に訳さずドイツ語のままで用いることとした。テキストを読めばわかるように，ヴォルフの Judenthum 概念は非常に内容豊かであり，日本語の「ユダヤ教」ではその意味を汲みつくすことができないと判断したからである。ただし，Wissenschaft des Judenthums は「ユダヤ学」と訳した。ドイツ語をそのまま使う（「Judenthum の学問」）のはあまりに不自然であるが，他方で「ユダヤ教学」もまた上記の懸念を解消できず，苦肉の策として考えた訳語である。一貫性がないことは承知している。皆様方の御寛恕を乞う次第である。また抄訳版ではドイツ語テキストの隔字体と思われる箇所に傍点をふっていたが，今回は一切しないこととした。ドイツ語テキストの印刷状態の問題で，どれが隔字体かを判別することが困難だったからである。

＊本研究は JSPS 科研費 21K00092 の助成を受けたものです。

---

[8] Ibid.

[9] Ibid., 298.